

ニューエイジ思想の輪廻観と水子供養

小 松 加代子

1970年代から80年代にかけて、急激な勢いで広まったと言われる水子供養が、その儀礼の根拠を問われながらも存続し、今も多くの寺院や神社、新宗教で見かけるようになっている。また、日本独特な儀式とその流行の仕方に、海外の研究者の注目も集めている。

本論文では、水子供養が現在悩んでいる病や苦悩の原因を水子に帰し、その供養をすれば治るという脅しの側面を有し、しかもその恫喝が性別役割に基づいて主に女性に対して力を及ぼしている点を問題として取り上げる¹。その解決方法のひとつとして、水子供養をめぐる議論の中で触れられることの少なかった中絶自体の意味、そして生命の始まりについて宗教がどのように答えるのかという問題を指摘したい。そして、生命の始まりを異なる角度から宗教的に説くニューエイジ思想を紹介することによって、中絶経験に対するまったく違った解決方法の可能性を探ろうとするものである。

1. 水子供養とたたり

水子供養は基本的に「たたり」の原理がなければ成立しないと鳥井は述べている²。実際に水子供養の現場で「たたり」信仰が浸透していることは、限られた調査ではあるが次のことから分かる。水子供養をしてほしいと寺院を訪れる人々を対象としたアンケート統計によれば、「水子に対して、どんな気持ちをお持ちですか」という問いに対して、「罪を感じる」と「罪を感じることもある」を加算すると、85.2%になる。また、「供養しないと、タタリがあると思いますか」という問いに対しては、「思う」に、「思うところもある」を加えると、72.1%になる。調査をした1人である岩本は、供養者自身の意識内には、「タタリに対する恐れ、現世利益への希求、水子の追憶・追悼等の念が分けがたく一体となっ

ている」と結論づけている³。

こうした中で、伝統仏教も水子供養を行うことを否定することはまれで、むしろ水子供養を正当化するために「たたり」の表現だけを取り除こうとしているように見える。鳥井は、教団の建前との衝突を避けようとする仏教僧侶の言説として、「たたり」という言葉を使わずに、殺人であるとするもの、中絶が子どもに害悪をもたらすとするもの、胎児の人権を守る、つまり、「水子」としてではなく、「子ども」「人」として供養する必要があるとするもの、の3つをあげている⁴。このうち殺人罪であるとするものと、生まれた子供に害悪をもたらすという2説は、「青少年の非行」や「現代人の精神の荒廃」を水子と結びつける、姿を変えた脅しであることには変わりない。最も論理が破綻していないと考えられる第3の説にしても、胎児を一生を終えた人や今生きている人と同等に扱うという点で、その罪悪感やたたりという考え方をどう払拭できるのか明らかではない⁵。

このように「たたり」批判が、水子供養に見られる女性に対する性差別的な側面をまったく解決していないことは、注目に値する。中絶を体験した女性たちが非難され、中絶が罪とみなされるようになった背景を考えてみたい。

2. 水子供養とジェンダー

水子供養を依頼する女性たちが1970年代から80年代にかけて増加した背景としては、次のような事柄が考えられる。まず、1955年から1975年にかけて、多くの女性が専業主婦化し、核家族を中心とした画一化された家族像が作られた⁶。家庭の中では性別役割分業がはっきりし、女性は家事と育児に専念することが理想とされ、それに伴って、生来のものとして子を慈しむ母という神話が誕生した⁷。この母性神話からすれば、子供を望まない女性は問題ある存在と見なされやすくなった。

さらに、優生保護法の成立以来、1955年までは急激に増加していた人工妊娠中絶が、それ以降逆にかなりのテンポで減少した。1960年代には、産児調節の中心は人工妊娠中絶から避妊へと移行し、近年では中絶はいわば最終的手段となっており、「中絶すること」の意味が深刻なものとして受け止められるようになってきた⁸。

また、戦後、出産そのものが医療施設で医療専門家の手で行われるようにな

り、産婦は出産の実態を知らないままに主体の立場から降ろされていたように、人工妊娠中絶についても同様、何が起きて、また胎児がどう処理されたのかについて、まったく無知のままにとどまっていた。そのことが、中絶の罪悪感を外側から押し付けられる素地を作ることになった⁹。1960年代に当の中絶経験者の女性ではなく、産科医・胞衣業者等が水子供養を発願し、それをセンセーショナルにマスコミが書きたて、社会的意見を作り上げていった経緯にもそれがうかがえる¹⁰。

また、宗教団体が水子供養を行い始めた原因としてヴェルブロウスキーは、戦後の政教分離、農地改革で、現金収入の道がたたれた宗教教団が、都市化と核家族化によって減少した永代供養の収入を補おうとしたという経済的な要因をあげている¹¹。

以上のように、水子供養の背景には、社会構造および家族形態の変化に伴う性別役割の強化と、それをめぐるジェンダーの神話の形成があったことを見ることができる。母性神話のなかで主婦となった女性が人工妊娠中絶を選ばなければならなかった場合、それが女性としての存在自体に問題があるとされ、人口の減少や性の乱れを危惧する人々の非難を一身に浴びるようになった。そして、その際に直接的な現金収入の道として、安易に受け入れてきた宗教団体の存在があったことが、水子供養の流行を招いた要因といえよう。現在水子供養を実施している寺院の70%は昭和40年代以降に儀礼を始めているという¹²。まったく新しい儀式が作り出されたことを考えると、上記のような社会的風潮を宗教団体が無批判に受け入れたまま水子供養を行ってきたことは明らかで、死んだ胎児を供養する思想上の根拠の問題を避けたまま実施してきたことの責任は問われなければならない。

水子供養のはらむ性差別の問題は、80年代以降活発に議論されてきた「たたり」の問題だけでは解決しないことはすでに明らかである。「たたり」を説くことと、その非難が女性に集まること、そのどちらも人間の生命の始まりと終わりについての説明を根拠にして成り立っている。受精の瞬間から一個の人格を持った存在とすると、どのような理由であっても、それが断たれるとき、流産であれ人工妊娠中絶であれ、そこには取り返しのつかない罪の概念が浮かび上がってくる。中絶とは生命を絶つことであり、すなわち悪であるという認識がある限り、悪い結果を導くと考えられやすく、その矛先はそれを実際に体験する女性に向けられがちである。

しかし、いったい受精を生命の始まりとすることは、自明の理なのだろうか。井桁は、人権概念は近代社会において人間が構築した思想であり、絶対的な真理ではないことを認識した上で、「受胎した瞬間から人間」という主張は、それぞれの社会・文化が恣意的に借定している一種のパラダイムにすぎないと指摘している¹³。にもかかわらず、伝統仏教、キリスト教、そして新宗教の一部は、近代的人権思想や科学・医学的見地に依存して、受精が生命の始まりであることを自明の理であり、絶対的真理であるかのように語っている。いったい宗教思想上、受胎した瞬間から生命が始まるという説明に必然性はあるのだろうか。ここでまったく違う観点から生命の始まりを語る思想を取り上げることによって、現在日本の水子供養の根拠そのものを問うことにしたい。

3. ニューエイジの世界観

広範囲に広がっているさまざまなニューエイジ系¹⁴運動の思想に共通するニューエイジ世界観といったものを探った著作の中で、ハンネグラフは、そのひとつとして死後の生の存続をあげている¹⁵。ニューエイジにおける輪廻思想は、ヒンドゥー教や仏教の輪廻とは異なり、現世的な性格を持っているとハンネグラフは述べている。とりわけその背景には「連続的な霊的進化」、すなわち人間は宇宙の進化という普遍法則の元で自らを進歩させるために生きていて、この世は人間が進歩するための教育を受ける場であるという思想がある。したがって、人は何度もこの世に生まれ変わり、その度に異なる課題を達成しようとしているという。一度の生で進歩を達成できないということは、永遠に無明の世界に囚われるといった現世否定的な見方につながるのではなく、弱いながらも現世肯定的な考え方につながるとハンネグラフは述べている。「宇宙は完璧なものなので、あなたがすることすべて、貴女に起こることすべては完璧なのである。あなたは何を選ぼうと、自分独自にそして完璧に、自分と他者の進化に貢献している¹⁶。」だとすれば、人が何らかの選択をした場合、何事が起ころうが、それは宇宙の計画にあるものだから、それ以上に良いものはあり得ないということになる。

宇宙の進化における転生とは、誰もが自分自身の進化の過程で必要なことを学ぶため、死を経た次の生を自分自身で選ぶのだという。学ぶことが目的であるため、楽な人生を選ぶというわけではない。むしろ、

自分自身のハイアー・セルフは、痛みや苦しみも学びの必要な部分であることを知っている。したがって、個々人の「学びのプログラム」を組むときには、休息や調和、幸福といったものは優先権を持たず、進歩のために最大の機会を与えてくれるものが選ばれる。

こうした考えは、日本でヒーリングやセラピーの活動をしている人々の中にも見られる。ニューエイジ思想が一部で受け入れられている要因に、輪廻の考え方があるように思われる。

魂の成長のために何度もこの世に転生します。ある人生が終わると、私たちは死後の世界でその人生を反省し、おろかだった自己を矯正すべく次の人生に向けてプログラムを組みます。

それはひじょうに厳しい経験が取り入れられたものかもしれませんが、私たちは死後の世界の裁判官や賢者などに強制されてではなく、自ら進んで、自分自身に試練を課すのです。神さまが罪を裁き、天罰を下すではありません。すべてはカルマの法則に則って、ひとつひとつの魂が学んだ結果なのです。生まれ変わりって、じつに合理的で前向きにできているものなのです¹⁷。

このような考え方に従えば、中絶という行為を行うことも、それ自体が悪や罪だということではなく、その行為によって何かを学ばなければいけないことがあるという、人生に対してより積極的な解釈も可能となるのである。

「解決されていないパターン」「意味のない苦しみ」「不公正」といったものは存在しない。すべて起こることは、学ぶべきものとして我々にハイアー・セルフが提供するものであり、それを受け取らなければならない。しかし、与えられたレッスンに積極的な方法で対応し、それが教えてくれることを吸収した場合にのみ、意味を持ち正しいのである。自分に課せられた不公正を非難することは、罪を他者に投影し、自分自身の人生の責任を放棄することになる。こうしてレッスンに失敗すると、それは次の人生で再び学ばなければならなくなる¹⁸。

すべて現世の状態は自分で選択したものであり、その解決方法こそこの世での課題というわけである。中絶について、次のように回答しているヒプノセラピストもいる。

声を大きくして、申し上げたいのは、子供を産む、産まないは、女性の自由です。中絶は悲しいことですが、やむをえない決断をだれが批判できましょう。…私自身、「誕生の瞬間まで胎児は魂を確定しない」ということを信じているので、中絶に関して、クライアントには決して罪悪感を持たないように言っています。前世とか、転生を勉強するとわかってきますが、生まれるか生まれないかは、母親だけが決定するものではありません。生死にかかわる重要なことは、もっと上の高い意識のレベルで決定されます。母親の魂と胎児の魂との同意もさることながら、子供の魂のカルマやレッスンなど、いろいろな要素がからんで決定されると思います¹⁹。

また、著者がインタビューしたチャネラーのAさんも、水子という考え方について、魂は自ら生のあり方を選んで誕生するのであるから、一方的に中絶した側に罪があるとするのはおかしい考え方であると応えている。また、I氏は、誕生時について次のように述べている。

胎児の時には「気」がない。赤ちゃんが産道を通っているときもこの状態は同じで、外気に触れたとたんに霊体が入り込み、気を感じる。…「両親というのは、誰であるかは知らない霊体と靈魂を迎え入れる、赤ちゃんという器を生むのだ」。…外気に触れたとたんに気でできた霊体が入り、その瞬間に、その赤ん坊の業を見ることができる。それは、この赤ん坊に一生変わることなく、ついていくカルマなのだ²⁰。

生命は出産直後に魂が入ったときをもって始まりとなる。このような世界観に基づけば、中絶という行為は別の一つの生命を断つことではなく、当の妊娠に関わった人々の人生のおける一つの選択であり、学びの一つであるということになる。妊娠、そして中絶という体験を自分の人生の中で積極的に位置づけ、むしろその後の人生に活かすことが勧められているのである。

ただし、こう説く人々が供養を全面的に否定しているかという点、そうでも

ない。上記のヒプノセラピストは、次のようにも付け加えている。

望むなら、ヒプノセラピーの中や、瞑想中に、子供の魂を呼び出して、今回生めなかったことに対してお詫びし、いつか準備が整ったときに生んで可愛がるという約束をすることもできます²¹。

当の本人が自分の経験を肯定的に受け止めるために必要であれば、供養や祈りという行為もありえるという態度であろう。これは日本で行われている水子供養に関し、とりわけ海外の研究者が注目することの多い、中絶を経験した女性の苦しみを解放するものとしての癒しの側面である。欧米のキリスト教文化の中では、中絶体験者に対してケアがなされてこなかったために、日本における水子供養の儀礼を通して女性が癒されるという側面に関心が寄せられている²²。ただし、宗教的な意味づけを問題とせずに、現状のままで水子供養が女性、あるいはその家族の救済となっているという解釈には問題があることは、上記に論じてきたように言うまでもないことである。

4. 終わりに

人工中絶や流産による「水子」に対する供養は、江戸時代から一部で行われていたという。ただし、ここで行われていた供養は、水子が生み出すたたりを鎮めるためではなく、子を失った悲しみの慰撫とともに、輪廻と生まれ変わりへの願いと結びついていたという²³。共同体で子を失うことの悲しみを全体で受け止めていた流れ灌頂の習慣からすると、現代の水子供養はそうした共同体を失った現代人が、個人で不安を解消せざるを得ないからだ、と小野は主張している²⁴。同様の慣習を調査した根本は、女たちの悲しみに対して仏教の僧侶たちが無力であったのではないかと推測し、女たちの自助活動がそれを救っていたと指摘している²⁵。子をなくした女の悲しみに対して、今もまた宗教団体は脅すばかりで役に立たないのだろうか。生の始まり、そして死について、宗教の説くべき大きな課題を棚上げしていることにこそ、問われるべき問題があるのではないだろうか。

ここで取り上げたニューエイジ思想は、ほんの一部にすぎないが、その輪廻にまつわる説明には、現世的、進化論、個人の宗教体験の重視など、ニューエ

イジの特徴をはっきり見て取ることができる。こうした新しい観点から見た日本の伝統的な宗教思想に対する批判も必要ではないだろうか。ただし、ニューエイジ思想は、ハンネグラフが述べているように、まったく新しいものではない。むしろ19世紀に登場した思想を世俗的に言い換えたもの²⁶であり、1970年代になってようやく、現在の社会を批判する形で新しい運動として高まってきたのである。今日マスメディアにのり、ヒーリングブームの中で商業化される一面もあるが、ニューエイジが新しい代替思想を提供し続けることができるのか、個人の体験を重視することによって、宗教性が希薄化していかないか、今後の展開が注目される。

注

- 1 川橋は水子供養の問題として、「たたり」信仰を商業化した、いわゆる恫喝の側面と、中絶の責任と罪の意識を一方的に女性に押しつける性差別的な側面をあげている。川橋範子「水子供養」『女性と教団』国際宗教研究所編、ハーベスト社、1996年。川橋「書評 William LaFleur 著、Liquid Life」『光陵女子短期大学研究紀要』13号、1995年、1-5頁。また、アンダーウッドは、水子供養を、弱者である女性が社会に受け入れられるために行う儀礼であると述べている。「水子供養は悔い改めの行為である。悔い改めることによって、女性は伝統的な家族や社会的権威の中に自らを位置づけることができる。儀礼を通して、今まで通りの家族の役割や義務の配置のなかに自らを位置づけなおそうとする。」Meredith Underwood "Strategies of Survival: Women, Abortion, and Popular Religion in Contemporary Japan", *Journal of the American Academy of Religion*, Vol. 67 No. 4, 1999, pp.762-763. 同様の視点としてバードウェル・スミスは、現代の水子供養が、中絶を経験した女性たちの嘆きの過程を切り抜ける助けとなっている一方で、中絶の必要性を高くとどめる諸要因へ注意を向けることを回避していることにもなっていること、従って、根本的な諸問題を長期化していると述べている。バードウェル・スミス「水子供養における死との直面」『異文化から見た日本宗教の世界』ポール・L・スワンソン・林淳編、法蔵館、2000年、34-71頁。
- 2 鳥井由紀子「「水子供養」研究の動向（1977-1994）と「水子供養」関連文献目録」、『宗教学年報』XII、1994年、p.134.
- 3 東京工芸大の神原和子、岩本一夫、大西昇のグループによる調査である。岩本一夫「みず子供養にみる宗教性の問題」『東京工芸大学工学部紀要』Vol.10 No.2 1987, p.39.
- 4 鳥井由紀子、前掲書、p.134.
- 5 ただし、例えばその説をとると思われる石川力山は、たたりを増幅し、その責任を女性の側だけに負わせる機能をしている水子供養を曹洞宗として破棄すべ

きだと主張していることは、注目に値する。石川力山「『水子供養』をめぐる」『曹洞宗報』、1993年、24-43頁。

- 6 落合恵美子は、家族の戦後体制と呼んでいる。落合恵美子『21世紀家族へ[新版]』有斐閣、1997年。
- 7 例えば、大日向は、母性愛神話への疑問を口にすることによって、強烈的な抵抗を受けた経験や、説明しがたい母への郷愁が文化的装置のなかで作り出されてきたことを指摘している。大日向雅美『母性愛神話の罫』日本評論社、2000年。
- 8 高澤淳夫「人工妊娠中絶の計量的考察—「水子供養」現象との関連をめぐる—」『水子供養』高橋三郎編、行路社、1999年、81-112頁。
- 9 藤田真一『お産革命』朝日新聞社、1979年。吉村典子『子どもを産む』岩波新書、1992年。
- 10 1960年代には「堕胎天国ニッポン」の陰にある死胎児処理の紹介という記事などによって、残酷性を強調すると同時に、その供養へと関心を呼び起こす中で、「水子」が死胎児の名称として定着したという。「水子供養の文化と社会」研究会『誕生前の「死」?—現代日本の水子供養』。これは、専門の研究者だけでなく、一般の人たちにも役立ててもらおうと、ホームページを通じて公開されたものである。www.ne.jp/asahi/time/saman/index.htm
 また、斎藤美奈子は評論『妊娠小説』のなかで、世界家族計画会議で日本の中絶による人口減少を欧米諸国から非難されたことと、皇太子出産のニュースにより中絶糾弾と出産美化の報道が増え、中絶＝殺人という等式が既定事実とされる風潮が始まったとしている。斎藤美奈子「純妊娠小説の台頭」『妊娠小説』筑摩書房、1994年。
- 11 ヴェルブロウスキー、R. J. ツヴィ「水子供養—最も重要な日本の「新宗教」に関する覚え書き—」『國學院大學日本文化研究所紀要』1993年、第72号。
- 12 高橋由典「二つの水子供養」『水子供養』行路社、1999年、114頁。
- 13 井桁碧「『水子供養』について(1)」『宗学研究』第38号、1996年。
- 14 小池は、「ニューエイジとは、大まかに言えば、調和的な／ホリスティックな世界観のもとに、緩やかなネットワークの中で、自己の「今ここ」での意識変容を目指す、先進工業諸国における諸潮流」とまとめている。小池靖『宗教と社会 別冊 1998年度ワークショップ報告書』宗教と社会学会、1998年、8-12頁。島蘭は、ニューエイジ運動という言葉があいまいで、その周辺の運動をも含めた形で用いられることもあり、混乱があると述べている。また、地域的特徴を他地域に当てはめてしまう危険性もあり、グローバルな現象として、「新霊性運動」という言葉を提唱している。本論文では、日本の伝統的・民族的宗教思想に対する思想として比較するため、ニューエイジの用語を用いた。島蘭進『精神世界のゆくえ—現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年。
- 15 Wouter J. Hanegraaff *New Age Religion and Western Culture; Esotericism*

- in the Mirror of Secular Thought*, State University of New York Press, 1998.
- 16 Ibid., p.285. ニューエイジの主潮流として、ハンネグラフは、チャネリング、ヒーリングと個人の成長、ニューエイジ・サイエンス、ネオパガニズムの4つをあげている。
 - 17 『生まれ変わりセラピー—前世療法で自分と出会う』花田美穂、大和出版、37-38頁。
 - 18 同上書、268-9頁。
 - 19 ヒプノセラピスト・やのうせつこのホームページから。2000年。
www.geocities.co.jp/Technopolis/3556/marriage4.html
 - 20 森田健、『不思議エネルギーの世界3』樫出版社、96頁。またインタビューした際、死についてI氏は、霊体が体を離れるのは、心臓が止まったときであるから、脳死による移植手術は殺人に等しいと話していた。
 - 21 やのうせつこのホームページ。
 - 22 例えば、William R. LaFleur, *Liquid Life; Abortion and Buddhism in Japan*, Princeton University Press, 1992.
 - 23 伊藤公雄「『説得』のレトリック／『納得』の論理」『水子供養』167頁。千葉徳爾・大津忠男『間引きと水子』農漁村文化協会、1983年。
 - 24 小野泰博「流れ灌頂から水子供養—共同供養の喪失の意味するもの」『伝統と現代』1982年75号。
 - 25 根本治子「仏教における民衆救済の課題—医療の立場から」第59回日本宗教学会における発表、2000年9月14日。
 - 26 ハンネグラフは、思想としては「世俗化された秘教 secularized esotericism」と呼ぶほうが適当かもしれないと述べている。Hanegraaff, p.522.